

東北大学工学部のポートフォリオによる 「学習の成果」検証取組みの成果と課題

－「学習等達成度記録簿」に関する学生・教員対象アンケート実施結果報告－

関内 隆^{1)*}，宇野 忍²⁾，葛生政則¹⁾，北原良夫¹⁾，板橋孝幸³⁾

1) 東北大学高等教育開発推進センター，2) 東北大学大学院教育学研究科，3) 福島大学総合教育研究センター

I はじめに

(1) 問題と目的

現在，学士課程教育の再構築に関する議論が起ころうとしている。中央教育審議会大学分科会が平成19年8月に取りまとめた審議経過報告書は，「学士課程教育の再構築に向けて」とのタイトルを掲げ，冒頭では「我が国社会の将来の発展のため，学士課程教育の再構築が喫緊の課題であるという認識に立っている」と述べている。また，そうした背景として，明確な『学習成果』を重視する国際的な風潮の中で日本の大学における「学士」の水準の維持や向上を図る必要があること，大学全入時代を迎えて，経済社会から出口における質の保証を実現できる教育システムの再構築を強く迫られていること等をあげている。さらに，より具体的な目指すべき教育改革の方向性にも言及しており，そのひとつとして学習者本位の改革を進める必要性が提言されている。すなわち，学生が本気で学び，社会で通用する力を身に付けるよう，きめ細かな指導を行った上で，客観化・多面化に向けたさまざまな創意工夫を凝らしつつ，何ができるかという「学習の成果」を重要視し，厳格な評価を行うことが強く要請される，と主張している。

このように現在，学生がどのような学習動機を持ち，大学教育において如何なる学習の成果を身に付けたか等を総括的かつ丁寧に点検評価する取組みが図られるべき段階にあると言えるが，東北大学工学部が採用しているポートフォリオ「学習等達成度記録簿」による

「学習の成果」検証システムは，こうした学士課程教育の再構築に向けた学生支援策として有意義な一つの展望を示している。この制度の特徴は，教育の評価方法としてポートフォリオ評価法を導入している点にある。ポートフォリオ (portfolio) とは元々は建築家が自分の創作した設計図をファイルしたファイルのことであり，ポートフォリオ評価法とは学習者が学習活動において制作した作品等を学習者毎の専用ファイルに入れておき，教師と学習者が必要なときに取り出して検討を加え，作品や創作活動を点検改善するという方法である。「学習等達成度記録簿」による学生指導は，そうした本来的ポートフォリオのコンサイス版とも言える手法であろう。

工学部では平成15年度入学学生より，①勉学等の目的意識の明確化に基づいた自らの達成目標の自覚と達成度の継続的な把握を学生に促し，②勉学等に関するアドバイスや支援の機会を学生に提供しつつ，③他方で教員側も，学生の毎年の到達度や抱えている諸課題を把握し，④学生の教育に関わる満足度を常に点検すること，これらを目標に掲げて，アドバイザー教員が毎年あるいは Semester 毎に学生と面談をしてきめ細かな指導を行う取組みを実践している。現在利用しているポートフォリオの形式は，A4用紙4ページの各欄に，①大学4年間における勉学目標および勉学以外の目標の入学時点での記述，②各年次における学習成果の100点満点での自己評価，各年次の目標に関する自由記述とその達成度評価，それらへのアドバイザー

*) 連絡先：980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学高等教育開発推進センター

教員の所見記入，③卒業時点における勉学目標達成度評価，勉学以外の達成度や成果，在学中をふり返っての感想，アドバイザー教員の意見を書き込む形式になっている（後掲資料を参照）。

我々は，学生個人の入学から卒業までの学習成果をポートフォリオに基づいて学生が自己評価するという先導的なこの取組みがどのような成果をもたらし，学生と教員からの評価は如何なるものであるかをより包括的に検証するために，工学部の平成16年度入学（4年次）学生ならびにアドバイザー教員を対象にアンケート調査を工学部教務委員会のご協力を得て行った。本稿の目的は，調査によって得られた結果をもとに，学生・教員による評価の実態，取組み成果と今後解決すべき課題等について報告することにある。なお，本論の各

項目については担当者による分担執筆とした。

(2) 調査方法

(A) 調査の概要

教員対象の質問紙と学生対象の質問紙を作成し，アドバイザー教員及び4年次学生を対象に，質問紙調査を行った。調査用紙は，工学部教務委員会委員長の許可を得て，平成19年12月3日に対象者に配布され，2週間ほどの期間を経て，工学部教務課が回収し，それを送り返していただいた。

(B) 調査対象者と調査用紙回収率

4年次学生969名，アドバイザー教員328名が対象となり調査用紙を配布した。調査用紙の回収率は以下の通りである。

学科名	学生			アドバイザー教員		
	配布対象	回収	回収率	配布対象	回収	回収率
機械知能・航空工学科	268	116	43%	154	40	26%
電気情報・物理工学科	297	101	34%	82	18	22%
化学・バイオ工学科	143	85	59%	30	15	50%
材料科学総合学科	133	79	59%	23	8	35%
建築・社会環境工学科	128	77	60%	39	32	82%
合計	969	458	47%	328	113	34%

(C) 調査用紙の構成

調査用紙A4判1枚に所属学科（専攻）名の記入とともに，7項目の質問に対する4段階評定あるいは自由記述で回答するようにした（後掲資料の学生用ならびに教員用アンケート用紙を参照）。学生に対する質問は，①「学習等達成度記録簿」の記載項目や記載スペースの適切さに関する4段階評定と回答理由の自由記述，②達成目標の自覚度，③到達度の把握，④授業等をめぐる問題点，改善要望などの申し立て，⑤勉学等の相談のしやすさ，これら4項目の4段階評定，そして⑥「学習等達成度記録簿」制度への総合的な4段階評定と回答理由，最後に⑦「学習等達成度記録簿」制度に関する自由記述，以上の7項目である。教員に対する質問は，学生用調査用紙の項目と基本的に同一の質問に対して教員の立場から回答するようにした。

なお，回収された調査用紙のデータ整理と集計に関

しては，東北大学大学院文学研究科の柁淵文夫，武蔵貴弘，大谷哲，武田佑太，教育学研究科の蛭名正司，宮田佳緒里，佐藤誠子，教育学部の阿部夏葉，以上8名の学生諸氏から多大な協力を得た。ここに記して謝意を表したい。（宇野 忍・関内 隆）

II ポートフォリオによる「学習の成果」検証 取組みに関する学生と教員の評価

(1) アンケートの集計結果

本取組みに関して学生対象ならびに教員対象に行ったアンケート集計結果は，各質問項目に即した学生，教員の全体集計，そして学生，教員の学科別集計として掲げた以下の表の通りである。

学生全体集計

	学生全体集計		記載項目スペース
質問1・選択肢1	53	12%	とても適切
質問1・選択肢2	245	53%	やや適切
質問1・選択肢3	108	24%	やや不適切
質問1・選択肢4	23	5%	全く不適切
無答	29	6%	
全体	458	100%	
			達成目標の自覚
質問2・選択肢1	14	3%	強くそう思う
質問2・選択肢2	106	23%	ある程度そう思う
質問2・選択肢3	242	53%	それほど思わない
質問2・選択肢4	93	20%	全く思わない
無答	3	1%	
全体	458	100%	
			到達度の把握
質問3・選択肢1	12	3%	強くそう思う
質問3・選択肢2	114	25%	ある程度そう思う
質問3・選択肢3	231	50%	それほど思わない
質問3・選択肢4	97	21%	全く思わない
無答	4	1%	
全体	458	100%	
			問題点、改善点の 申し立てやすさ
質問4・選択肢1	11	2%	強くそう思う
質問4・選択肢2	87	19%	ある程度そう思う
質問4・選択肢3	226	49%	それほど思わない
質問4・選択肢4	129	28%	全く思わない
無答	5	1%	
全体	458	100%	
			学生生活全体の相 談のしやすさ
質問5・選択肢1	11	2%	強くそう思う
質問5・選択肢2	116	25%	ある程度そう思う
質問5・選択肢3	227	50%	それほど思わない
質問5・選択肢4	99	22%	全く思わない
無答	5	1%	
全体	458	100%	
			この制度の評価
質問6・選択肢1	16	3%	高く評価
質問6・選択肢2	149	33%	ある程度評価
質問6・選択肢3	214	47%	それほど評価せず
質問6・選択肢4	73	16%	全く評価せず
無答	6	1%	
全体	458	100%	

教員全体集計

	教員全体集計		記載項目スペース
質問1・選択肢1	8	7%	とても適切
質問1・選択肢2	72	64%	やや適切
質問1・選択肢3	25	22%	やや不適切
質問1・選択肢4	3	3%	全く不適切
無答	5	4%	
全体	113	100%	
			達成目標の自覚
質問2・選択肢1	2	2%	強くそう思う
質問2・選択肢2	47	42%	ある程度そう思う
質問2・選択肢3	55	49%	それほど思わない
質問2・選択肢4	8	7%	全く思わない
無答	1	1%	
全体	113	100%	
			到達度の把握
質問3・選択肢1	3	3%	強くそう思う
質問3・選択肢2	48	42%	ある程度そう思う
質問3・選択肢3	53	47%	それほど思わない
質問3・選択肢4	8	7%	全く思わない
無答	1	1%	
全体	113	100%	
			問題点、改善点の 把握のしやすさ
質問4・選択肢1	5	4%	強くそう思う
質問4・選択肢2	54	48%	ある程度そう思う
質問4・選択肢3	41	36%	それほど思わない
質問4・選択肢4	11	10%	全く思わない
無答	2	2%	
全体	113	100%	
			学生生活全体のアド バイスのしやすさ
質問5・選択肢1	5	4%	強くそう思う
質問5・選択肢2	63	56%	ある程度そう思う
質問5・選択肢3	37	33%	それほど思わない
質問5・選択肢4	6	5%	全く思わない
無答	2	2%	
全体	113	100%	
			この制度の評価
質問6・選択肢1	5	4%	高く評価
質問6・選択肢2	62	55%	ある程度評価
質問6・選択肢3	36	32%	それほど評価せず
質問6・選択肢4	7	6%	全く評価せず
無答	3	3%	
全体	113	100%	

学生学科別集計

質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科
質問1・選択肢1	10	5	16	11	11
質問1・選択肢2	59	57	47	39	43
質問1・選択肢3	32	24	15	18	19
質問1・選択肢4	5	7	6	4	1
無答	10	8	1	7	3
全体	116	101	85	79	77
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科
質問2・選択肢1	2	3	6	3	0
質問2・選択肢2	27	16	19	19	25
質問2・選択肢3	61	54	45	37	45
質問2・選択肢4	26	26	15	20	6
無答	0	2	0	0	1
全体	116	101	85	79	77
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科
質問3・選択肢1	1	3	6	2	0
質問3・選択肢2	27	18	25	18	26
質問3・選択肢3	64	49	39	36	43
質問3・選択肢4	24	28	15	23	7
無答	0	3	0	0	1
全体	116	101	85	79	77
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科
質問4・選択肢1	1	1	2	6	1
質問4・選択肢2	17	13	19	21	17
質問4・選択肢3	56	51	40	32	47
質問4・選択肢4	42	33	24	19	11
無答	0	3	0	1	1
全体	116	101	85	79	77
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科
質問5・選択肢1	1	0	3	5	2
質問5・選択肢2	20	17	21	25	33
質問5・選択肢3	65	49	43	34	36
質問5・選択肢4	30	31	18	15	5
無答	0	4	0	0	1
全体	116	101	85	79	77
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科
質問6・選択肢1	2	0	6	5	3
質問6・選択肢2	29	24	27	28	41
質問6・選択肢3	58	54	39	32	31
質問6・選択肢4	26	20	13	13	1
無答	1	3	0	1	1
全体	116	101	85	79	77

教員学科別集計

質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科	その他
質問1・選択肢1	2	5%	9%	11%	14%	1
質問1・選択肢2	29	73%	73%	67%	43%	11
質問1・選択肢3	7	18%	9%	22%	43%	6
質問1・選択肢4	1	3%	0%	0%	0%	2
無答	1	3%	9%	0%	0%	1
全体	40	100%	100%	100%	100%	21
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科	その他
質問2・選択肢1	1	3%	0%	0%	14%	0
質問2・選択肢2	13	33%	45%	67%	43%	10
質問2・選択肢3	25	63%	36%	33%	43%	9
質問2・選択肢4	1	3%	18%	0%	0%	2
無答	0	0%	0%	0%	0%	0
全体	40	100%	100%	100%	100%	21
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科	その他
質問3・選択肢1	1	3%	0%	11%	14%	0
質問3・選択肢2	14	35%	55%	56%	29%	11
質問3・選択肢3	23	58%	36%	33%	57%	8
質問3・選択肢4	2	5%	9%	0%	0%	2
無答	0	0%	0%	0%	0%	0
全体	40	100%	100%	100%	100%	21
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科	その他
質問4・選択肢1	2	5%	0%	22%	14%	0
質問4・選択肢2	16	40%	45%	56%	71%	10
質問4・選択肢3	19	48%	45%	11%	0%	9
質問4・選択肢4	3	8%	9%	11%	0%	2
無答	0	0%	0%	0%	14%	0
全体	40	100%	100%	100%	100%	21
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科	その他
質問5・選択肢1	2	5%	0%	11%	29%	0
質問5・選択肢2	17	43%	91%	78%	43%	13
質問5・選択肢3	18	45%	9%	11%	29%	7
質問5・選択肢4	3	8%	0%	0%	0%	1
無答	0	0%	0%	0%	0%	0
全体	40	100%	100%	100%	100%	21
質問\所属学科	1. 機械知能・航空工学科	2. 電気情報・物理工学科	3. 化学・バイオ工学科	4. 材料科学総合学科	5. 建築・社会環境工学科	その他
質問6・選択肢1	2	5%	0%	11%	29%	0
質問6・選択肢2	20	50%	36%	56%	71%	15
質問6・選択肢3	13	33%	64%	22%	0%	4
質問6・選択肢4	4	10%	0%	0%	0%	2
無答	1	3%	0%	11%	0%	0
全体	40	100%	100%	100%	100%	21

(2) 「学習等達成度記録簿」の記載項目等に関する学生と教員の評価

質問 (1) 「『学習等達成度記録簿』の記載項目や記載スペースは適切でしたか」への回答は、「とても適切」、「ある程度適切」、「それほど適切ではない」及び「全く適切ではない」の4つの評価選択肢と、評価理由を記入する自由記述欄から成る。実際の回答を見ると、自由記述欄には、「記載項目」、「記載スペース」に関するもの以外に「記録簿」そのものについての一般的な意見も記入されている。以下では、評価に関しては、学生、教員のそれぞれについて全体及び学科別に、また、学生と教員の類似点と相違点を、さらには、自由記述欄の記入内容について、順に述べることにする。なお、以下の議論で割合を示す場合には、無効回答（無回答等）を除外している。

学生全体の回答を見てみると、「とても適切」と「ある程度適切」を合わせ7割弱の学生が肯定的な評価をしている。しかし、「とても適切」が12%であるのに対し「ある程度適切」が57%となっている点、及び、「それほど適切ではない」(25%)と「全く適切ではない」(5%)を合わせ約3割の学生が否定的な評価をしている点を考慮すると、学生が多少なりとも何らかの点で不満をいっていることがうかがえる。実際、自由記述欄には、さまざまな否定的意見が記入されている（記述内容の詳細は本稿後半を参照されたい）。

同様の観点から学科別に見てみると、5学科中肯定的な評価の割合がもっとも高い「化学・バイオ工学科」（とても適切：19%+ある程度適切：56%=75%、それほど適切ではない：18%+全く適切ではない：7%=25%）から、肯定的な評価の割合がもっとも低い「機械知能・航空工学科」（とても適切：9%+ある程度適切56%=65%、それほど適切ではない：30%+全く適切ではない：5%=35%）まで、割合に多少の凹凸は見られるが、学科間での大きな傾向の違いは見られない。実際、この2学科の間で、回答を「肯定的回答」と「否定的回答」の2つに分け比率の差を検定してみると、有意水準5%でも有意差は見られない。

次に教員について見てみると、全体の回答では、「とても適切」、「ある程度適切」を合わせ約4分の3の教員が肯定的な評価をしている。しかし、「とても適切」

がたったの7%であるのに対し「ある程度適切」が67%となっており、学生全体の場合と比較して割合の対比が著しい結果となっている(学生1:4.75, 教員1:9.57)。教員の回収率が34%と低いことから考えても、回答してくれた教員は、こういった調査に対する意識が高いか「記録簿」に対し積極的な（必ずしも「肯定的」ということではない）教員であると予想され、その意味で厳しい評価をしている可能性が高いため、教員と学生の間でこのような対比が生じたものように思われる。ただし、教員の方の回収率が悪く標本数も少ないのであまり信頼のおける結果ではないが、比率の差を検定してみると有意水準5%でも統計的には有意差はない(10%だと有意差がある)。

同様の観点から教員についても学科別に見てみると、5学科中肯定的な評価の割合がもっとも高い「電気情報・物理工学科」（とても適切：10%+ある程度適切：80%=90%、それほど適切ではない：10%+全く適切ではない：0%=10%）から、肯定的な評価の割合がもっとも低い「材料科学総合学科」（とても適切：14%+ある程度適切：43%=57%、それほど適切ではない：43%+全く適切ではない：0%=43%）まで、割合にかなりの凹凸があり、学科間で傾向が大きく異なるように思われる。ただし、この2学科の間で、回答を「肯定的回答」と「否定的回答」の2つに分け比率の差を検定してみると、標本数の関係であり信頼できる結果ではないが、有意水準5%でも統計的には有意差はない。また、学生の回答と学科別で比較しても、顕著な差は見られない。

最後に、自由記述について見てみよう。記述内容の全体的な傾向としては、肯定的・建設的なものよりは否定的なものが多い。なお、この自由記述欄への記入率は、学生で約50%、教員で約35%であり、以下の議論もこの点を念頭に置いてお読みいただきたい。

「記入スペース」については、表現の仕方は別にし、「適切」との回答が多いが、「広すぎる」から「狭すぎる」に至るまで、学生、教員双方からさまざまな意見が寄せられており、個人差が大きい。スペースいっぱい記入する必要はないと明示した上で、できるだけ広いスペースを確保しておくことになるだろう。

一方、「項目」（及び一般的な事柄）についても、さ

まざまな意見が寄せられている。肯定的なものとしては、「項目」それ自体ではなく「一般的な事柄」についてのものが圧倒的に多く、「一年をふり返り次年度の目標を立てる契機になる」「成長を確認することができる」「自己評価の（自己を見つめ直す、日頃の学習状況をふり返る、自分の弱点を客観視する）機会になる」「学習意欲を高める契機になる」(以上、学生)、「学生が目標をもって学習を進められるようになる」(教員)といった、チェックポイントとしての有効性に関するものが多かった。

「項目」についての否定的意見としては、項目それ自体や構成及び記入方法などの再考を促すものが目立つ。「項目が抽象的で記入しにくい（過去との比較や将来の計画立案が困難）」「項目を具体的なものにすべきである」「内容が理解しにくい、どこに何を記入すればよいのかわかりにくい」（以上、学生、教員とも）といった項目それ自体が不適切であるとするもの、「1、2年生では答えにくい項目がある」「入学時から自己評価することが不可能な科目がある」「工学部の教育目標（カリキュラム）に合っていない」「学科・専攻により項目を変えるべきである」（以上、学生、教員とも）、「項目が多すぎる」（学生）、「学習面は成績から把握できるので精神面など人間としての成長を確認する項目を入れるべきである」（教員）といった項目の構成が不適切だとするもの、「100点満点での記入は困難」「5段階（ABC程度の）評価でよい」（以上、学生、教員とも）といった評価方法が不適切だとするもの、「基準が明確でなく客観性がない」「主観的な記入にどれほどの意味があるか」（以上、学生、教員とも）といった客観性を疑問視するもの、「すべて自由記述にした方がよい」「自由記述欄を『学習』と『生活』に分ける」「学年ごとの目標の具体例を示してほしい」（以上、学生）、「学生記入欄と教員記入欄が紛らわしい」（教員）という記入のしにくさを指摘するもの、などがある。

一般的な事柄についての否定的意見としては、「計画を立てる上で1年は長すぎ3ヶ月くらいが適当」(学生)といった実施形態に関するものや、「制度が形骸化している、形式的にすぎる」(学生、教員とも)、「自己評価だけなら記録簿は不要」「研究室配属後は不要

(以上、学生)、「学生の学習状況を把握する資料としては不十分」(教員)といった制度の在り方そのものに疑問を呈するものがあった。（北原良夫）

(3) 取組みの効果に関する学生と教員の評価

学生用・教員用アンケートの質問(1)(共通)に対する回答の特徴の1つは、学生、教員とも「ある程度は適切」も含めて肯定的に評価する回答者の割合がそれぞれ65%、71%と比較的大きい点が特徴であった。これに対して、学生と教員は学生用・教員用アンケートの質問(2)~(5)に対して、どのように回答しているのだろうか。また、学生と教員の回答は、どのような特徴を持っているのだろうか。以下では、こうした点について考察しよう。

(A) 質問(2)の調査結果の特徴

まず、学生用アンケートの質問(2)「毎年(セメスター)の自分の達成目標を自覚するようになりましたか」に対する学生の回答全体をみると、回答の3%が「強くそう思う」、23%が「ある程度そう思う」であり、両者合わせた肯定的評価の回答は3割に満たない(26%)。これに対して、回答した学生の53%が「それほど思わない」、20%が「全く思わない」と答えており、両者合わせた否定的評価の回答が多く、回答した学生の7割を超している(73%)。学科別にみた場合も、それほど大きな差異は認められない。質問(2)に対する学生の回答の特徴は、「それほど思わない」も含めた否定的評価の回答割合が大きい点である。

次に、教員用アンケートの質問(2)「各学生の毎年(セメスター)の達成目標を把握することができるようになりましたか」に対する教員の回答をみよう。回答の2%が「強くそう思う」、42%が「ある程度そう思う」であり、両者合わせた肯定的評価の回答は44%である。「ある程度そう思う」の回答割合は教員の方が学生よりも明らかに大きい。この点は、教員の回答の特徴の1つである。質問(2)に対する教員の回答の特徴は、まず、肯定的評価の回答割合が学生よりも大きい点である。「学習等達成度記録簿」に基づいた指導によって、自分の達成目標を自覚するようになったと考える学生の割合よりも、学生の達成目標を把握できるようになったと考える教員の割合の方が相対的に大きい

である。

他方、回答した教員の49%が「それほど思わない」、7%が「全く思わない」と答えており、否定的評価は56%である。「それほど思わない」の回答割合は「ある程度そう思う」の回答割合と同程度であり、大きな差はない。また、肯定的評価（「強くそう思う」と「ある程度そう思う」）の回答割合と、否定的評価（「それほど思わない」と「全く思わない」）の回答割合でみても両者の間にはそれほど大きな差はなく、同程度である。肯定的評価と否定的評価の回答割合が同程度である点も、質問（2）に対する学生の回答と異なっており、教員の回答の特徴の1つである。学科別にみた場合、肯定的評価の回答割合が、化学・バイオ工学科（67%）と材料科学総合学科（57%）で他学科（36～48%）よりもやや大きいという特徴がある。

(B) 質問（3）の調査結果の特徴

まず、学生用アンケートの質問(3)「毎年(セメスター)の自分の到達度を把握することができるようになりましたか」に対する学生の回答全体をみよう。回答の3%が「強くそう思う」、25%が「ある程度そう思う」であり、肯定的評価の回答は28%に過ぎない。他方、回答した学生の50%が「それほど思わない」、21%が「全く思わない」と答えており、否定的評価の回答は71%である。学科別にみると、肯定的評価の回答割合は化学・バイオ工学科(36%)と建築・社会環境工学科(34%)の方が他学科（21～26%）よりもやや大きくなっている。ここでは、各学科とも否定的評価の回答割合の方が肯定的評価の回答割合よりも大きい点に注目しておこう。質問（3）でも学生の回答の特徴は否定的評価の回答割合が大きい点であるといえよう。

次に、教員用アンケートの質問（3）「各学生の毎年（セメスター）の到達度を把握することができるようになりましたか」に対する教員の回答全体をみると、回答の3%が「強くそう思う」、42%が「ある程度そう思う」であり、肯定的評価の回答は45%である。質問（3）でも、「ある程度そう思う」の回答割合は教員の方が学生よりも大きい。この点は、質問（3）に対する教員の回答の特徴の1つとあってよい。「学習等達成度記録簿」に基づく指導によって、自分の学習の到達度を把握できるようになったと考える学生の割合

よりも、学生の学習の到達度を把握できるようになったと考える教員の割合の方が大きい。

他方、回答した教員の47%が「それほど思わない」、7%が「全く思わない」と答えており、否定的評価は54%である。先にみた質問（2）と同様に、質問（3）でも「それほど思わない」の回答割合は「ある程度そう思う」の回答割合と同程度であり、両者の間に大きな差はない。また、質問（3）でも肯定的評価（「強くそう思う」と「ある程度そう思う」）の回答割合と、否定的評価（「それほど思わない」と「全く思わない」）の回答割合は同程度である。質問（3）においても、肯定的評価と否定的評価の回答割合が同程度である点は、教員の回答の特徴の1つである。学科別にみた場合、肯定的評価の回答割合は化学・バイオ工学科（67%）、電気情報・物理工学科（55%）、建築・社会環境工学科（52%）の方が、材料科学総合学科（43%）、機械知能・航空工学科（38%）よりも大きいという特徴がある。

(C) 質問（4）の調査結果の特徴

まず、学生用アンケートの質問（4）「教育や授業をめぐる問題点、改善要望などを申し立てやすくなりましたか」に対する学生の回答全体をみると、回答の2%が「強くそう思う」、19%が「ある程度そう思う」となっている。肯定的評価を回答した学生は21%に過ぎない。他方、回答した学生の49%が「それほど思わない」、28%が「全く思わない」と答えており、否定的評価の回答は77%である。学科別にみると、肯定的評価の回答割合は、材料科学総合学科（35%）、化学・バイオ工学科（24%）、建築・社会環境工学科（23%）の方が他学科（14～16%）よりも大きい。こうした点はあるが、ここでは各学科とも否定的評価の回答割合の方が肯定的評価の回答割合よりも大きい点に注目すべきであろう。質問（4）でも、学生の回答の特徴は、否定的評価の回答割合が大きい点であるといつてよい。

次に、教員用アンケートの質問（4）「学生が抱える教育や授業をめぐる課題、改善要望などを把握しやすくなりましたか」に対する教員の回答全体をみよう。回答の4%が「強くそう思う」、48%が「ある程度そう思う」であり、肯定的評価の回答は52%であり、5割に達している。質問（4）でも、「ある程度そう思う」

の回答割合は教員の方が学生よりも大きく、5割弱である。この点は、質問(4)に対する教員の回答の特徴の1つである。「学習等達成度記録簿」に基づく指導によって、教育や授業についての問題点や改善要望等を申し立てやすくなったと考えている学生の割合よりも、学生が抱える教育、授業に関する課題や改善要望等を把握しやすくなったと考えている教員の割合の方が大きい。

また、「ある程度そう思う」の回答割合(48%)が最も大きく、「それほど思わない」の36%を明らかに上回っている。「それほど思わない」と「全く思わない」(10%)を合わせた否定的評価は46%である。質問(4)でも肯定的評価と否定的評価の回答割合が接近している点は、質問(2)、(3)と同様であるが、それだけにとどまらない。質問(4)の教員の回答では、肯定的評価の割合が否定的評価の割合より大きくなっており、この点は学生の回答と比較した場合の特徴というだけでなく、質問(2)、(3)に対する教員の回答と比較した場合の特徴でもある。学科別にみた場合、肯定的評価の回答割合が、材料科学総合学科(85%)、化学・バイオ工学科(78%)の方が、建築・社会環境工学科(48%)、機械知能・航空工学科(45%)、電気情報・物理工学科(45%)よりも大きい点が特徴である。

(D) 質問(5)の調査結果の特徴

まず、学生用アンケートの質問(5)「勉学を含めて学生生活全体の相談がしやすくなりましたか」に対する学生の回答全体をみてみよう。回答の2%が「強くそう思う」、25%が「ある程度そう思う」となっている。肯定的評価は回答した学生の3割に満たない(27%)。他方、回答した学生の50%が「それほど思わない」、22%が「全く思わない」と答えており、否定的評価の回答は7割である(72%)。学科別にみた場合、肯定的評価の回答割合は、建築・社会環境工学科(46%)、材料科学総合学科(38%)、化学・バイオ工学科(29%)の方が他学科(17~18%)よりも大きい。建築・社会環境工学科では肯定的評価の回答(46%)が否定的評価の回答(53%)に比較的近いという点はあるが、ここでは、多くの学科で否定的評価の回答割合の方が肯定的評価の回答割合よりも明らかに大きい点に注目しておきたい。質問(5)の学生の回答の特徴は、大部

分の学科で「それほど思わない」も含めた否定的評価の回答割合が大きい点であるといえよう。

次に、教員用アンケートの質問(5)「勉学を含めて学生生活全体についてアドバイスや支援がしやすくなりましたか」に対する教員の回答全体をみると、回答の4%が「強くそう思う」、56%が「ある程度そう思う」である。回答した教員の6割が、「学習等達成度記録簿」に基づく指導によって、勉学を含めた学生生活全体についてアドバイスや支援がしやすくなったと考えている点は、学生の回答と比較した場合の特徴であるだけでなく、質問(2)、(3)に対する教員の回答と比較した場合の特徴でもある。

また、肯定的評価の回答が多いことから当然であるが、否定的評価の回答割合が小さい点も質問(5)に対する教員の回答の特徴の1つである。「それほど思わない」(33%)と「全く思わない」(5%)を合わせた否定的評価は38%である。このように、質問(5)に対する教員の回答では、肯定的評価の回答割合が否定的評価の回答割合よりも明白に大きくなっている。学科別にみた場合、肯定的評価の回答割合が、電気情報・物理工学科(91%)、化学・バイオ工学科(89%)の方が、材料科学総合学科(72%)、建築・社会環境工学科(62%)、機械知能・航空工学科(48%)よりも大きい点が特徴である。

(E) 小括

これまで考察してきた学生用・教員用アンケートの質問(2)~(5)に対する学生と教員の回答の特徴をまとめておこう。

まず、質問(2)~(5)では、学生の回答者の少ない割合しか「ある程度そう思う」も含めた肯定的評価の回答をしておらず、「それほど思わない」も含めた大なり小なり否定的な評価を回答した学生が比較的多い点が特徴の1つである。

他方、教員の回答をみると、質問(2)~(4)では、肯定的評価を回答した教員の割合と否定的評価を回答した教員の割合にはそれほど大きな差がなく、両者が接近している点も特徴の1つである。しかし、詳しくみれば、質問(2)、(3)と質問(4)に対する教員の回答にはそれなりに違いがある。すなわち、質問(2)、(3)に対する教員の回答では、否定的評価の回答割合の方

が、肯定的評価の回答割合よりも大きい。これに対して、質問(4)に対する教員の回答では、肯定的評価の方が否定的評価よりも回答割合が大きくなっているのである。こうした点も、特徴の1つとってよい。

また、質問(2)~(5)では、「ある程度そう思う」と回答している教員の割合の方が学生のそれよりも大きいことも特徴の1つである。さらに、質問(5)では回答した教員の6割が「ある程度そう思う」も含めて肯定的に評価する回答をしている点も特徴の1つといえよう。(葛生政則)

(4) 取組みに対する学生と教員の総合的な評価

質問(6)では学生ならびに教員に対して「『学習等達成度記録簿』による指導の制度をどのように評価しますか」と尋ね、4段階評定とその判断理由について自由記述を求めた。学生全体では「高く評価する」3%、「ある程度評価する」33%という肯定的評価が36%を占めるに過ぎない。但し、質問項目(2)~(5)の取組み効果に関する個別項目に比べて多少高い数値を示している点に留意したい。また、学科別で見ると建築・社会環境工学科では肯定的評価が57%を占め、材料科学総合学科と化学・バイオ工学科の学生も39~41%の肯定的な評定を行っている。他方、教員による総合的な評価の全体集計では、「高く評価する」4%、「ある程度評価する」55%という数値を示し、肯定的評価が59%に上っている。学科別の教員集計表でも、材料科学総合学科の教員7名は全員、肯定的評定を行っており、むしろ、電気情報・物理工学科教員の64%が「それほど評価しない」との否定的回答を寄せていることが目立っている。これらを踏まえ、以下では学生と教員による総合的な評価の動向について学科別に自由記述回答を織り込みながら見ていくことにする。

(A) 機械知能・航空工学科

学生の肯定的な評価は27%に過ぎず、およそ4分の3の学生はこの取組みに否定的な評価を下していた。自由記述から見ると、「実際に記録簿を提出する人数もそれほど多いとは思えないし、指導する側もこの記録簿に対する意識が高いとは思えない」「教職員が目標達成記録簿をよく理解していない」など、「学習等達成度記録簿」による指導システムの周知不徹底がそ

の底流にあった状況が読み取れる。学生からは、「機能していなかった。手元に3年間ずっと記録簿があった」等の声が多く寄せられた。他方、肯定的評価を回答した学生からは、「大学という新しい環境に立たされた1年次に、教授と学習についての相談の機会が持てるというのは学生にとって心強いと思う」「大学入学直後から、自分の達成目標や到達度を意識する機会があるのはよいことだと思う」など、取組みの効果を一定程度裏付ける学生の声も聞かれた。さらに、「記録簿の記載内容については到達度などが曖昧である」等、取組み内容に即した改善意見も出されている。

さて、教員側の総合的な評価では55%の教員が肯定的な評価を行っていた。「毎年一人1時間程度かけて面談するので記録簿に残す以上に効果がある」「学生の抱えている問題や自信の有無など、日常では現れない内面が出て来るため、よりの確かな指導が可能になる」など、熱心なアドバイザー振りが窺われる教員の声が寄せられた。だが、「試みとしては評価できると思います。年に数回書かなければ役に立つのは難しいと感じます」など、取組みの改善点を挙げる教員が目立った。

(B) 電気情報・物理工学科

学生の4分の3以上が否定的な評価を下し、肯定的な評価は24%と低い結果を示している。学生からは「自分の場合はアドバイザーの先生との話が数回はあったがこれは稀なケースらしく、一回も話がないのが普通だそうである」「面談の時期などの周知方法、面談の内容など指導教官により差が大きすぎる気がする」等、教員側の対応に対する不満の声が聞かれた。さらには、「一度も面談がなかったのでよく分からない」「達成記録簿自体1度しか見たことがない」などの声も少なからず寄せられた。もちろん、熱心なアドバイザー教員のもとでこの取組みに大きな意義を感じ取った学生も存在し、「指導教官と Semester毎に面談を行い、進路等を話す機会がもてたためよかった」などの回答が寄せられた。

他方、教員による評価はどうか。肯定的評価は36%と他学科教員の回答に比べて相当低い数値を示し、約3分の2の教員が否定的な評価を下していた。しかしながら、「学生と教員が、記録簿のチェックと

いう名目で話をする機会があるという意味では評価できる」「記録より面談が重要である。書くことに抵抗がある課題について相談することにアドバイザーの役割があると思う」など、学生と教員との面談それ自体には意義を見出す声が多く寄せられた。さらに、「学習の中心は授業科目であり、抽象的な目標を立てても、具体的に日常どうすればよいのか学生にとってわかりにくい点が問題」「記録簿の設問自体が曖昧」「学生の履修科目成績表との比較が必要」など、記録簿の記載項目に関する貴重な改善要望が出されている。

(C) 化学・バイオ工学科

学生の39%がこの取組みに肯定的な評価をしているが、約6割の学生は否定的な評定を行った。否定的評価の声として、「記録簿が手元にある期間が短い為、自分で記入した内容を参照する機会がほとんどない」「教授と直接面談できることはとても良いが、教授一人に対しての人数が多く、さらに一年に一度では少ない」等、学習等達成度記録簿の回収制度や教員との面談回数についての改善要望が出されている。他方、肯定的評価としては、「自分の現状を認識することができ、具体的な目標をたてることができた」「学生と教授との数少ない接点でもあり、2, 3年次には研究室の空気に触れる良い機会でもありました」などの声が寄せられ、さらに、「教員と会うのは年に1, 2回が現状であるため、この記録簿を媒介としてより指導を密にした方がよい」「学生が目標を意識できてよい。しかし、もう少し強く意識させる必要がある」等、面接回数増加など、この取組みの徹底を図るべきとの要望が学生から出されていることに留意したい。

教員はその67%が肯定的評価を行っており、「教員が学生とface to faceで接触するのは非常に重要なのでたとえ1~2回でも、やらないよりはずっと良い」等と成果があげられているが、「定期的な面談は非常に有意義だが、記録することによりあまり意義がないうえに負担が大きい」「問題を抱えた学生に対する指導が最重要であるが、現システムではそれについてほとんど機能していない」などの課題も寄せられた。

(D) 材料科学総合学科

学生による肯定的な評価が41%に対して、約6割の学生は否定的な評定を行っている。否定的評定の理由

を拾ってみると、「アドバイザー教官との相談には意味があると思うが、記録簿は書いた内容を忘れてしまうのであまり意味がないため」「先生と面談すること自体には意味があるが、記録簿自体は形式的でさほど有意義とは思えなかった。」「教授との面談が年1回しかないのであまり効果がないように思った」など、教員との面談に意義を認めるものの、学習等達成度記録簿の記載内容や面談回数に関する改善要望が多く寄せられた。さらに、「教官によってまちまちで、教官によっては全然連絡してこないという話もある」などのような声も見られたが、「自分の達成度を見つめ直す良い機会だと思う」「大学生としての自覚を持つことができる点で良い」と学生の自覚を促している様子も明らかになっている。さらに、「教員との面談を定期的に行うことで学生生活の規律を正しくする気分になる」「指導教官からの適正な指示は参考になりました」等、教員とのコミュニケーションが学生に有意義なインパクトをもたらしている例も見られた。

さて、教員側は回答者全員が肯定的にこの取組みを評価している。その理由として「学生との面談の機会を定期的にもつことにより学生の状況把握がしやすい」「本人の入学時の目標と卒業時の達成度について明確化する。また、学生の満足度の観点から有効である」「学生と面会する機会を得たことは、評価に値する。但し、ポートフォリオ自体は学生に渡さないという意味がない」等の声が寄せられた。

(E) 建築・社会環境工学科

学生の57%が肯定的評価を行い、工学部全体のなかで一番高い数値を示している。「記録簿をつける度に昔はこんなことを思っていたのだなと思い返すことができ、気が引き締まり初心を思い出すうえで役に立った」「毎セメスターの終わりにそれまでの自分を見直す良いきっかけとなりました」など、達成目標自覚の促進について評価とともに、「必ずセメスターに1度教授に会いに行く機会があるので相談などはしやすい」など、教員との面談の機会を評価する声が目立った。他方、否定的評定を行った学生があげた理由としては、「指導教官を通して勉学を中心に相談する機会があったのは有意義でしたが、ポートフォリオによって目標・到達度を十分に整理することはできなかった」

「1 Semesterに1回では効果があまりない気がする」など、取組みへの否定ではなくむしろ面接回数の増加や記載項目の改善を求める声が寄せられている。

教員側の回答では71%が肯定的に評価していた。その理由として、「面談がしやすくなり、相互のコミュニケーションがとりやすくなった」などが挙げられているが、改善すべき点として、「成績の情報がないと指導が充分なものになりにくい」「学生の客観的な成績がわからないので、学生の申告に基づく主観的なものに留まっている」等、学生の成績データと連動させた指導への要望も出されている。また、否定的な評定を行った教員の声を含めて、「面談は重要であるが、記録簿の内容について改善の余地がある」「問題を抱えている学生は記録簿をもってこない傾向がある」など、記録簿の内容改善やこの取組みの学生への周知徹底を図るべきとの要望も出されている。（関内 隆）

(5) 取組みに関する学生・教員による意見

本アンケートでは、7つ目に「『学習等達成度記録簿』の制度について自由にご意見をお聞かせください」を質問項目として設定した。この自由記述欄に書かれた意見を大きく分けると、肯定的意見、否定的意見、否定的ではあるが提案型の意見、否定・肯定のどちらでもない意見の4つになる。教員は、全113名回収のうちの約60%にあたる67名がこの自由記述欄に回答している。肯定的意見は14名、否定的意見は30名、否定的ではあるが提案型の意見は21名、肯定・否定のどちらでもない意見は2名であった。学生は、全458名回収のうちの約43%にあたる198名がこの自由記述欄に回答している。肯定的意見は34名、否定的意見は123名、否定的ではあるが提案型の意見は37名、肯定・否定のどちらでもない意見は4名であった。否定的意見が多く見られるが、提案型の意見も出されており、「学習等達成度記録簿」の制度を改善してよりよいものにしてほしいという意見も読み取れる。以下では、紙面の都合上、学科単位の分析ではなく学部全体をまとめて、肯定的意見、否定的意見、否定的ではあるが提案型の意見を中心に検討を行う。

教員の主な肯定的意見は、①学生とのコミュニケーションの増加、②学生の学びを知る、引き継ぎの意味

での効果、③学生自身による目標管理・振り返りの効果、④カリキュラム評価指標の4点であった。「学生と面談することにより、学生の様子を感じ取れるようになって教育を考えるようになった」といった肯定的意見が多かった。学生の主な肯定的意見は、①教員とのコミュニケーションの増加、②教員の助言の有効性、③文書による学習目標の可視化の3点であった。「低学年次には教員との個人的接触が少ないので、面接の機会は貴重である」との回答が多かった。

教員の主な否定的意見は、①学生が来ないこと、②研究室配属後は不必要、③形式の問題、④仕事量の増大、⑤記録簿に関する無理解、⑥学生の熱意の欠如、⑦学生の自主性・自立性を失うことの7点であった。「本当に問題のある学生は面談に来ない」、「研究室に配属されて毎週ゼミに出席するようになれば必要ない」、「ポートフォリオの所在のルール（提出、収集）が徹底していない」といった意見が多く出された。学生の主な否定的意見は、①教員との連絡方法等、対教員に関すること、②書いたときだけで終わってしまうこと、③形式の問題、④記録簿に関する無理解、⑤学生の自主性・自立性を失うことの5点であった。「教員と連絡を取りあうのが難しい」、「年に一度しか『学習等達成度記録簿』を見ないので、何が目標なのか途中で忘れてしまう」といった回答が多かった。

教員の主な提案型意見は、①ウェブの利用、②様々な学生支援システムとの連携、③修学アドバイザー手帳やヒント集の作成の3点であった。ウェブの利用については、工学部教務委員会において導入を計画しているようであるが、教員・学生双方から提案意見が多く出されていた。学生の主な提案型意見は、①ウェブの利用等、管理・形式・記入時期の変更、②担当教員の変更、成績データと連動した学習指導等、対教員に関すること、③希望者のみが記入・面接すればいいというもの、④グループで話し合う場の設定の4点であった。「書いたきりでなくて時々見直したり書き直したりできるようになったら良い」、「指導教員が毎年変わるのではなく同じ教員で統一してほしい」、「先生方（あるいは研究室）と接する機会をもっと増やしてほしい」という要望も散見された。「個々の授業でアンケートをとっている授業評価に自身の学習成果を記

入する」といった他の制度と結びつけて改善を提案する意見もあった。

全体的に、面談を通じた教員・学生双方によるコミュニケーションの増加については肯定的意見が多く、形式・管理・記入時期等の運用面についてはさまざまな改善を要望する意見が出されたといえる。

(板橋孝幸)

Ⅲ 結びにかえて

これまで見てきたように、ポートフォリオ「学習等達成度記録簿」による学生指導の取組みに対する学生の評価は決して高いものではなかった。しかしながら、各項目の評定値や自由記述を丹念に検討してみると、この取組みを学生が真正面から否定しているとは言い難い。寄せられた自由記述からは、教員との面接についてほとんどの学生が評価しつつも、面接回数少なさ、あるいは学科や教員側の対応の不徹底さに不満を抱えており、記録簿の記載項目・自己評価方法や記録簿回収システムに関わる改善要望が多く出されていたことに留意したい。取組み効果4項目への学生による肯定的評価が21～28%であったのに対して、総合的評価では学生の36%が肯定的評定を行い、1学科では57%の値を示していた。

他方、教員による回答では、各項目で学生よりも高い肯定的評価を下しており、否定的評価の高かった学科の自由記述からは、むしろ今後の改善策が多く提示されていたことが注目される。教員にとって、学生との面談を通じたコミュニケーションの増進と学生をめぐる状況把握の機会という面では、多くの教員が有意義と判断している様子が窺えた。

今回のアンケート結果の検討を通して、今後解決すべき課題が明確になったといえる。取組みの趣旨を学生、教員に徹底し、面談を通じた勉学等のアドバイスや支援の機会を増やしていくことが最初に実行すべき課題となろう。さらに、記録簿の記載項目、自己評価方法や記録簿回収システムについての改善も必須であるが、この点では、4年間の実践を経た平成18年度末の点検評価をもとに、工学部自体がすでに、学生の成績データを組み込んだ新たなフォーマットと記録簿記入・回収に関するウェブ方式を準備しつつある。

より長期的には、記録簿に掲載される自己評価項目に関わって、学士教育課程全体の再構築を射程に入れた取組み改善も必要となろう。上述の総合的な評価結果の際に紹介した電気情報・物理工学科の一教員の意見にも現れていたように、抽象的な記述となっている各能力項目を学生が実際に履修する授業科目と関係させる作業が求められている。それは、学生が卒業時に身に付ける能力・資質と各授業科目の学習到達目標との関連を明確にするために、いわゆる「カリキュラム・マップ」を作成する作業をこの取組みと平行して行うことであり、「学習の成果」を検証するシステムとして不可欠な基盤づくりになろうと考える。

「学習の成果」検証システムのパイロット事業として、東北大学工学部はポートフォリオ「学習等達成度記録簿」の取組みを実践し、その成果と課題を確認して現在、新たな進化したシステムを構築しつつある。東北大学の他学部は、工学部の先陣を切った実践の成果と自己点検結果を「後発性の利益」として捉え、各学部独自の学士課程教育システムを導入する段階に今や来ているのではないだろうか。(関内 隆)

学習等達成度記録簿

学籍番号	氏名	出身 高校
------	----	----------

所属学科 ()	学科 コース	備考欄
	(内線)	
研究室		

○現住所

住所	電話	固定電話	携帯	Eメール

変更があった場合は、下記に記入してください。

住所	電話	固定電話	携帯	Eメール

○帰省先

住所	電話	- () -

変更があった場合は下記に記入してください。

住所	電話	- () -

アドバイザー教員

年度	氏名	連絡先 (内線)
平成 年度		
平成 年度		
平成 年度		
平成 年度		
平成 年度		

(その1)

(1) 大学4年間における勉学目標

(2) 大学4年間における勉学以外の目標

(3) 自己採点 (各学年の春に、100点満点で自己採点を行ってください。採点が出来ない項目については、—— を記入しても構いません。)

項目	入学時	年	年	年	年	卒業時
工学に関する基礎知識 (物理・化学・数学・情報など)						
各工学分野の基礎知識 (専門科目など)						
課題を正確に理解する能力						
英語、その他の外国語による表現力						
人前での発表能力						
人と話し合ったり、議論する能力						
倫理観、責任感が身にしているかどうか						
社会性や国際感覚が身にしているかどうか						
読書、講演会への参加、英会話や情報処理学習など大学以外での学習による自己啓発・生涯学習能力						
実験計画などを設定できる能力						
実験計画で情報機器を操作できる能力						
実験計画を整理し、結果を的確に記述できる能力						
課題を発見できる能力						
課題を解決するための文献や、資料を検索でき、その要点を整理する能力						
自ら着想する能力・創造する能力						

(その2)

※目標(*)を記入する時、対応する達成度評価(**)は空欄とし、次回談話時に(**)の評価を書いて下さい。
 ※面談を1年に一度のみ実施する学科では、下記の破線を無視して記入下さい。

年		年	
(*)			
目標 ④			
.....			
(**)			
達成度 評価			
.....			
教員 用④		年 月 日 署名	
		年 月 日 署名	

(その3)

年		年	
目標 ④			
.....			
達成度 評価			
教員 用④		年 月 日 署名	
		年 月 日 署名	

(注1)「目標」には他学を中心に書き、授業以外の英会話、コンピュータ学習、読書、部活、クラブ、ボランティアなども書いてよい。

(注2)「教員用」のこの欄は、教員(アドバイザー)の意見および署名欄である。

(その4)

以下は、卒業時に書いてください。

(1) 大学在学中における勉学目標の達成度

(2) 大学在学中における勉学以外の達成度や成果

(3) その他、在学中を振り返っての感想(よかった点、悪かった点など)

(4) 教員(アドバイザー)の意見

○指定されたときに記録簿を受け取り、指定された期日までに各学科の事務係窓口に戻却してください。
 毎年4月(ただし、初回のみ5月または6月)、および、卒業時に記録していただきます。

○アドバイザーは、学生から受け取った際、目を通し、必要に応じて意見を記入し、署名(年月日も記入)して
 ください。

○個人の教育達成度を向上させるための記録です。結果は、各学科の教育プログラムの達成度判定用の資料や、
 今後のカリキュラム編成の改善等に利用されますが、個人の秘密は守られます。

アドバイザー—教員について

1. 学生の学習を効果あらしめるため、アドバイザー教員をおく。
2. アドバイザー教員は、毎年4月および学生の卒業時に学生と個人面接し、学生の学習状況を把握すると共に、
 学習に対する指導・助言等を行い、学生の学習促進を図る。また、そのことを学習等記録簿に記録しておく。
3. アドバイザーは、必要に応じて、学科長、クラス委員、教務委員等と連携して学生の学習促進を図る。

学習ポートフォリオ(「学習等達成記録簿」)に関するアンケート調査実施について

東北大学高等教育開発推進センター

高等教育開発推進センターでは大学教育カリキュラムの成果を検証するシステムに関する調査研究を行っております。このたび、工学部で実施されている学習ポートフォリオ(「学習等達成記録簿」)について4年次学生(平成16年度入学)を対象にアンケート調査を行うこととなりましたので、ご協力をよろしくお願い致します。

◇ 所属学科をご記入下さい。所属学科名 _____

◇ 学習等達成記録簿による指導についてうかがいます。

(1)「学習等達成記録簿」の記載項目や記載スペースは適切でしたか。

①とても適切 ②ある程度は適切 ③それほど適切でない ④全く適切でない

理由： _____

(2) 毎年(セメスター)の自分の達成目標を自覚するようになりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(3) 毎年(セメスター)の自分の到達度を把握することができるようになりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(4) 教育や授業をめぐる問題点、改善要望などを申し立てやすくなりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(5) 勉学を含めて学生生活全体の相談がしやすくなりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(6)「学習等達成記録簿」による指導の制度をどのように評価しますか。

①高く評価する ②ある程度評価する ③それほど評価しない ④全く評価しない

理由： _____

(7)「学習等達成記録簿」の制度について自由にご意見をお聞かせください。

ご協力ありがとうございました。

学習ポートフォリオ(「学習等達成記録簿」)に関するアンケート調査実施について

東北大学高等教育開発推進センター

高等教育開発推進センターでは大学教育カリキュラムの成果を検証するシステムに関する調査研究を行っております。このたび、工学部で実施されている学習ポートフォリオ(「学習等達成記録簿」)について4年次学生担当アドバイザー教員を対象にアンケート調査を行うこととなりましたので、ご協力をよろしくお願い致します。

◇ 所属専攻(系)をご記入下さい。所属専攻(系) _____

◇ 学習等達成記録簿による指導についてうかがいます。

(1)「学習等達成記録簿」の記載項目や記載スペースは適切でしたか。

①とても適切 ②ある程度は適切 ③それほど適切でない ④全く適切でない

理由： _____

(2) 各学生の毎年(セメスター)の達成目標を把握することができるようになりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(3) 各学生の毎年(セメスター)の到達度を把握することができるようになりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(4) 学生が抱える教育や授業をめぐる課題、改善要望などを把握しやすくなりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(5) 勉学を含めて学生生活全体についてアドヴァイスや支援がしやすくなりましたか。

①強くそう思う ②ある程度そう思う ③それほど思わない ④全く思わない

(6)「学習等達成記録簿」による指導の制度をどのように評価しますか。

①高く評価する ②ある程度評価する ③それほど評価しない ④全く評価しない

理由： _____

(7)「学習等達成記録簿」の制度について自由にご意見をお聞かせください。

ご協力ありがとうございました。